
照葉と未苗

辰野さとり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

照葉と未苗

【Nコード】

N8007Z

【作者名】

辰野さとる

【あらすじ】

千字前後の百合短編の連作（予定）。照葉^{てるは}と未苗^{みなえ}という女の子の、不安だったり希望だったりがちらほら見える日常のお話。名言や逸話を拾ってきて、それを軸にした話作りを心がけるとおもいます。

ひとりきり（前書き）

ほのかに百合。女の子が『一緒にいる』というところの重点を置いた感じです。恋愛ものと友情ものの間で、恋愛寄り？ ぐらいです。

ひとりきり

定期テスト前。

照葉と未苗は、一緒にこたつに入って問題集を解いている。こたつの温度は少し低め。未苗の家のこたつは小さくて、お互いの体温がほのかに感じられる。

「うー、わたしも照葉ちゃんみたいに勉強できたらなあ」

未苗はぺたん、と机に突っ伏してしまう。長い間考えているのは苦手だった。

「私になっても仕方ないわよ。例えば、そうね。ガーシュウィンとラヴェルの話をしましょうか」

「だれ？」

「作曲家。ガーシュウィンは独学ですごい作曲家になったんだけど、やっぱりプロに教えてもらいたいと思ってたの。それで、有名な作曲家だったラヴェルに教えてもらおうとしたんだけど、『あなたはもう一流のガーシュウィンなんだから、二流のラヴェルになる必要はないでしょう』って言われたのよ」

ちよつとは未苗の気分が晴れるかな、という照葉の期待とは裏腹に、未苗はさらに考え込んでしまう。

「ううん……」

「ちよつとわかりにくかった？」

「わかった！ それじゃあ、わたし『照葉ちゃんの恋人』じゃないね！」

「え、あの、どうして……？」

照葉の心に、ふわふわとした綿菓子のような、とらえどころのない不安が浮かぶ。

未苗は照葉にとって、憧れの女の子だった。元気で、可愛らしくて、純粹で。閉じこもってしまいがちな照葉と違って、未苗はどんどん先へと進んでいくことができる。

照葉が一番憧れていたのは未苗のそんな姿であり、恐れているのもそれだった。

心を砕いて紡ぎあげた、なによりも守りたいこの関係。それが、小さなきっかけで変わってしまうような気がして。

「ガーさんも、ラヴェルさんも、世界でただひとりきりなんだよ。恋人なら何人でも作れるけど、同じ子はひとりもない。考えたくないけど……照葉ちゃんの恋人になれる人って、わたしのほかにもいると思う。だけど、『照葉ちゃんの未苗』になれるのはわたしだけだね」

「……私の恋人は、これからずっと未苗だけよ」

未苗にとつても、そうだったらいいな。

照葉は寒さに震える手で、こたつの中の未苗の手を握った。繋いだ手を通して、温もりを伝え合う。

目には見えないけれど、確かに二人は繋がっている。

「えへへ、ありがとう」

そんな、冬の日。

てぶくろ(前書き)

こんなんばっかりかよ？

こんなんばっかりです！

たぶん！

てぶくろ

指先から寒さが染み込むような冬の朝。

「手、つなごー!」

未苗に屈託のない笑顔で見つめられて、照葉は動揺してしまう。

「う、うん……いいよ」

付き合う前から、手を繋ぐ事は多かった。それはとても普通なこととで、当たり前に行っていた。

けれど、意識して手を繋ごうと思うと、どうしても上手くいかない。

結局、未苗の手を握ろうとして、照葉の手は空を掴んでしまう。

「照葉ちゃん、どうしたの?」

「ごめんなさい。私、どうやって手を握ったらいいのか、わからなくなっちゃって」

わたし、なんて情けないんだろう。照葉は内気な自分が嫌になつて、雪に覆われた地面を見下ろした。

知っている場所なのに、雪に覆われているだけで、踏み出すのがこわい。

「んー、きつと考えすぎなんだと思うよ」

「でも、考えないと、怖くて……なにか、間違えてしまいそうで」「ねえ照葉ちゃん、キスの仕方、知ってる?」

「知ってるけど、そんなの、わからないわ。したこと、ないし…

…」

照葉の心臓がはじけそうになって、顔を真っ赤に染める。

二人は付き合い始めて日が浅い。キスなんてした事がないし、照葉は未苗と一緒に出掛けるだけでも緊張してしまう。友達よりも遠ざかったように見えるほど。

けれど、二人の心の距離は付き合う前よりずっと近い。

「手を繋ぐのも、キスするのも、そんなに難しいことじゃないよ。

でも、考えてもわからないかも。だって、わたし手の繋ぎ方なんて習ったことないもん」

だからね、と未苗は続ける。

「してみればわかるし、してみないとわからないよ！ ほら！」

未苗は照葉の手をしっかりと握り、笑いかける。

照葉はガラスに触れるような慎重さで、分厚い手袋越しに未苗の手を握り返した。

「ね？ もう握れるでしょ？」

「うん……臆病で、ごめんなさい」

「臆病でもいいよ。そういうところも含めて、照葉ちゃんのこと、全部好きだから！」

ぱらぱらと、小さな花びらのような雪が舞い散る。

「私も、その、未苗のこと……全部好きだから」

照葉は赤くなつた顔をマフラーで半分隠したが、ただでさえ熱くなつていた顔がもっと熱くなつてしまった。

学校には、まだ着かない。

水のような恋（前書き）

すこし長めです。

水のような恋

テストが終わった週末。二人は照葉の部屋で話をしていた。

これは、付き合い始めた二人の一番大切な儀式。話題はなんでもいい。二人のこと、家族のこと、そして、世界のこと。大小さまざまなことを、二人で向き合って真剣に話し合う。

好き合っているからといって、相手が自分と同じことを考えていると思ひ込むのはよくない。お互いが別の人間なのだから、同じになることなんてありえない。

だからこそ、こうしてお互いの同じところ、違うところを確認する儀式が必要なのだ。

「恋って、なんなのかな？」

今日の話題は、恋の話。持ち出したのは未苗の方だった。

「プラトンによれば、恋とは狂気らしいよ。恋することで、人は自分を制御できなくなってしまうの」

「照葉ちゃんは……いま、自分を制御できないの？」

「い、いや、ええと、それは、たとえ話だからっ」

慌てる照葉を見て、未苗はふふつと悪戯っぽく笑う。照葉は少しだけむくねながらも、未苗のことを怒れない。

そうやって笑っている時の未苗を、一番愛おしく思っているから。「でも、プラトンさんは恋が悪いものだって言ってるの？」

「ううん。恋は、神様からの素敵な贈り物なんだって」

「それじゃあ、わたしが照葉ちゃんと一緒にいられるのは、神様のおかげなんだ！ 素敵だね！」

照葉は顔を真っ赤に染めて、しかし未苗の方からは目を逸らさない。ずっと恥ずかしさに負けっぱなしなのは嫌だったのだ。

「ねえ、未苗はどう思うの？ 恋について」

「わたし？ んーとね、わたしは恋っていうのがなんなのか、よくわからなかった。でも、照葉ちゃんのおかげで、少しだけわかつ

「ただ！」

今度こそ耐え切れずに俯いて、照葉は熱に浮かされた頭でぼんやりと考える。

わたしにとって、恋ってなんなんだろう。

照葉は未苗に出会うまで、これほどまでに狂おしく他人のことを考えた事はなかった。かけがえのない存在、と言うなら、家族もそうだと思う。普通の友達だって大切だ。

けれど、照葉は未苗に恋している。

それはとても不思議な感情で、照葉がよく知っている哲学の巨人や科学者たちは、照葉にとっての答えを見せてはくれなかった。ただ、今抱いている気持ちが恋なのだと、照葉は断言することができ

る。
「照葉ちゃんが好きって言うてくれたとき、わたしすごく嬉しかったよ。わたしが好きって答えたとき、照葉ちゃんも同じくらい嬉しいって思ってくれたらいいなって思った。それが恋なんじゃないかなあ？」

同じにはなれないけれど、同じ気持ちを抱いていたい。

そんな気持ちがあるのかもしれない、と照葉は思っ、なんとなくはなしに口が開いた。

「私、未苗のこと、好きだよ」

「うん。わたしも」

二人の恋は、まだ形のない水のように。けれどその水は透き通っていて、温かい。

ながれるもの（前書き）

ショートストーリーが続くだけだと思っていたら、どうも話に起伏をつけたようになってきたようです（作者が）

ながれるもの

「きれいな花だね！」

道端に、雪に紛れるような純白の水仙が咲いていた。

「うん……」

照葉は夢心地で未苗の横顔を見つめている。未苗の瞳は希望の火で満たされていて、溶けかけた雪など溶かしてしまいそうだ。

その燃えるような宝玉の瞳を見るたび、照葉の心には嫉妬の炎が燃え移っていた。未苗が希望を振りまくたび、照葉の心は深い沼に沈むようだった。

しかし、それは少し前までの話。

「ねえ、照葉ちゃんはなにかに嫉妬することって、ある？」

「え……それは、あるけど」

「わたしは、すごく嫉妬しがちなんだ。自分でもかっこ悪いな！って思うけど、劣等感っていうのかな、そういうのが強くて」

いつも笑顔を絶やさない未苗にそんな一面があるなんて、照葉は思ってみたこともなかった。嫉妬と恐怖に苛まれ続けているのは、自分だけだと思っていたのだ。

「こうやって綺麗な花を見るだけでも、自分がみじめに思えちゃうときがあるんだ。少し前までは、照葉ちゃんのことを見るのも辛かったよ。照葉ちゃんって毅然としてて、かっこよくて。だらしないわたしとは大違い。そんなことを思っで、憧れたり、嫉妬したりしてた」

「今も、そう思ってる？」

「ううん。今はぜんぜん思わないよ。だって、憧れの人だった照葉ちゃんが、わたしのことを認めてくれてるから。そうしたら、劣等感なんてなくなっちゃった」

未苗に笑いかけられて、照葉の心はじわりじわりと温まっていく。

「ね、未苗。わたしもずっと、嫉妬してたんだよ。未苗が楽しそ

うにいろんなものを見るたび、未苗に見られているのがわたしじゃないっていうのが悲しくて、見られているものが妬ましくて。でもね、今は未苗が見てくれてるってわかるから、嫉妬なんてしてないよ」

「へへ、ありがと、照葉ちゃん。なんかやな話になっちゃって、ごめんね」

「ううん、いいよ。話せるだけ、たくさん話そう？ 未苗と話せるだけで、私は幸せだから」

二人は手を繋いで、家路を歩み始める。

セルバンテスの言葉に、『嫉妬のない愛はあるかもしれぬ。だが恐れのもとなわぬ愛はない』というものがある。

確かに、今の二人に嫉妬はない。二人の心は限りなく近いところにあって、恋の水はどこまでも透き通っている。濁った妬みや嫉みは水の外から入る余地もない。

けれど、なにかが水に入ってくる恐怖。そして、溺れてしまいそうな恐怖は、常に二人に付きまとっている。恐怖が形を持つのはいつかわからないが、いずれその時は来る。

水は、流れずにはいられないのだ。

遠くから学校のチャイムが響いてくる。

どうか、ずっと鳴り響いていてほしいと、二人は願った。

この幸せな時間が、いつまでも続きますように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8007z/>

照葉と未苗

2011年12月29日22時51分発行